

“学びをひろげる わたしと〇人の会” 第20回研究会

松井さんの美術の授業

2017.4.14 松井直哉さん 提案

◆松井さんは中学校で美術の教師をしていた時に、入学してきた1年生の初めての授業を「私なりの美術に対する考え方を披露する」ことからスタートされていたそうです。そして、「私の美術に対する考え方の中核にあるのは、『絵なんか下手でいい』ということだといわれます。

「授業の基調」を次のように説明されました。(配布資料から)

絵をかくという行為は自己表現のひとつだと考えます。言葉での表現、表情での表現、体を使った表現などと基本的には変わらないと考えています。

あたりまえのことですが、表現という行為は

- 1) 自分の思いがある
- 2) 伝えたい相手がある
- 3) 伝える手段を選ぶ
- 4) その手段を上手に使いこなす

という段階があると思います。

学校教育において、小学校の低学年はともかく、中学校以降は信じられないくらい4)しか視野に入っていない美術科の教育が横行しています。つまり上手か下手かが価値観の大半を占める教育が行われ、子どもたちはその価値観にしばられ苦しんでいるのです。

絵をかくという行為が表現である以上、1) 2) がとても大切だ、というより、前提なのです。リンゴを見て美しいと思うから絵で表現する行為が始まります。その人がリンゴを見て何を感じているのかにおかまいなしに4)の上手いか下手かだけが問題になり、表現が下手な子や表現をしたくない子はどんどん絵をかくのが嫌いになっていきます。

私は特に1)の自分の思い、を大切にしたい。自分はこういうことに気づいた、自分はこういうことに心が震えた、等々、自分の思いを持つだけでなく、明確にするという段階を入れたいと考えます。自分の思いを明確にした上で、それでも絵はかかないという選択をしたなら、それはそれでその子の自己表現と認めるべきだとすら思ってしまう。

また、自分の思いを明確にし、かつ伝えたいと思ったら子どもたちは3) 4)の活動は放っておいても自ら体得しようと学習を進めると信じています。

◆松井さんの授業(ワークショップ)

自分の選んだリンゴを持って着席している参加者に向かって、「リンゴを見て思ったことを、何でもいいから教えてください」と問うことからはじまりました。

ところが会場に居並ぶ面々は、あわよくば「自分の考え、意見を発言したい」と虎視眈眈、その機会をうかがう、いずれ劣らぬツワモノばかりとみえます。

- ・赤い色、黄色い色、笑ってるみたい
- ・自分を惹きつけるものを選んだ。
- ・ものがあるから影ができる(といきなり、論が展開されます)。
- ・ひとつも同じものがないね。セザンヌはなんでリンゴばかりを描いたのか。
- ・リンゴ畑の思い出
- ・リンゴを食べたい・・・

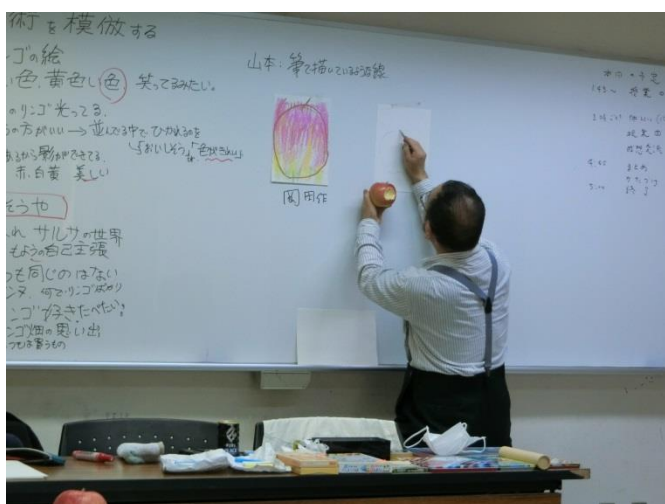
先生（松井さん）を、気遣っているのか、すでに自分の世界に入っているのか、とぼけているのか、とにかく最初から「通常の授業」の雰囲気から逸脱してしまいます。

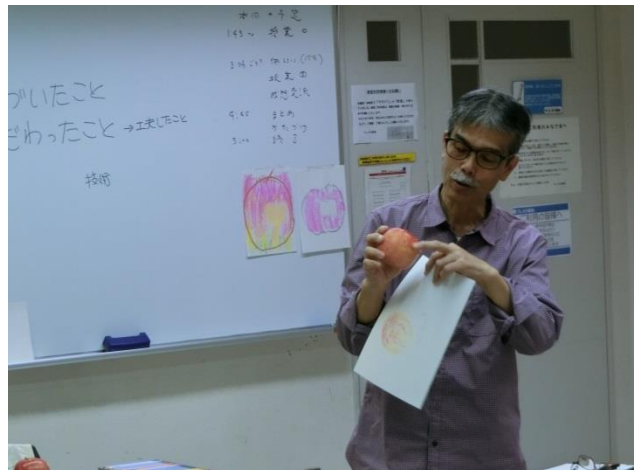
松井さんの「授業の展開計画」（配布資料から）は、

- ① 「自然は芸術を模倣する」（言葉の紹介程度にとどめる）
- ② リンゴを見て何を思うかの交流（どんな答えも認める）
- ③ 色に着目した人の絵の例示
- ④ 形に着目した人の絵の例示
- ⑤ ③の絵が他人に影響した場合→「自然は芸術を模倣する」が実現
- ⑥ 自分はリンゴを見て何を思うか
- ⑦ リンゴを描く
- ⑧ 作品の交流

もちろん「予定調和」の進行とはならず、にぎやかにすすみます。

ワーク中のスナップ写真を見てください。いつの間にやら、参加者はみんな松井さんに乗せられたのか、あるいは、学びは自分が中心とと思っている面々なので、自らの学びがはじまったように自分勝手に活動しています。松井さんのからだの動きもとてもしなやかに見えます。写真から、声は聞こえませんが、交わされている言葉が響いてくるようではありませんか。





◆課題として

この面々が黙っているわけがありません。おまけに少人数、しゃべりずめに喋りました。課題として残ったのは二つかな、と思います。

(1) 図工・美術の評価はどうするのか？

松井さんは、「(評価を指して)あれほど反教育的な仕事はない。いやでいやでしょうがなかった！」と、怒りをあらわにして(と見えました)話します。参加者が小・中・高・大・デザイン専門学校と所属がさまざまであったのですが、それぞれがいろいろに工夫を重ねて「評価」の問題をとらえて、取り組んでおられることがわかりました。

(2)「美術の授業を通して何を学ぶのか？」が話題になっているとき、「学び方であったり、学習に取り組むおもしろさ」ではないかと話が出て、これは美術だけではなくて他の教科でも同じだ、との意見がだされました。

そうだろうかという意見も出ました。例えば算数で、考えたり調べたり、話し合ったり、試行錯誤を繰り返しながら取り組んだ末に、パカッと殻が割れて算数・数学の真理と出会う快感、感動というものがあるのではないか。他の教科でも、その教科を学ぶことで出会う世界があるのではないか、との意見が出されました。これからの課題です。

◆最後にスタッフの山本さんが、

今回は「松井さんの授業」という具体的なワークがあったので、それを通して様々な課題を考えることができました。これからも具体的な授業を通して、教科の世界についても考えていきたい、とまとめました。